

# 小西隆裕「ウクライナ戦争と『第三次世界大戦』」を読んで

大谷美芳(10月10日)



『紙の爆弾』2022年10月号掲載、よど号グループの立場だろう。主旨は2点。

- ①「ウクライナ戦争は……ロシアによる……侵略戦争ではない。……ロシアを追い込んだ米国による戦争だ。」「米国はグローバルな覇権……『第三次世界大戦』なる。」
- ②「ウクライナ戦争が『第三次世界大戦』だとした時、その性格が問題になる。」「問われるのは、中口および、それと連携した非米脱覇権国家群をいかなる勢力だと見るかだと思う。」「そこには何か一本揺るぎない背骨……が通っている……。それは、米欧日の覇権……に反対し……闘い続けている反覇権・脱覇権という背骨ではないかと思う。」「覇権 vs 反覇権・脱覇権の戦争。」

①は「NATOの東方拡大が原因」論と「ウクライナはアメリカの代理戦争」論。これは多々ある。それでも大概は「中口も覇

権」論。ところが、②は「中国とロシアは反覇権・脱覇権」論。かなり特異である(エマニュエル・トッドと日本では孫崎亨が同じ考え)。

## (1) 大国間関係よりもまずロシアとウクライナの関係を見る 大国よりもまず人民を見る

ロシアの戦争目的は、覇権と勢力圏である。ウクライナを併合し、ソ連崩壊の失地を回復する。ロシア側からは侵略戦争である。ウクライナ側の戦争目的は、クリミアとドンバスを含め、ソ連崩壊時に分離・独立した領土と主権の防衛である。プロレタリア階級からブルジョア階級まで、国民と民族の全体が戦う、反侵略・祖国防衛戦争である。

民族的・国家的関係は、歴史的に一貫してロシアが抑圧、ウクライナが被抑圧であった。とりわけスターリンの時期、ソ連の工業化は農民の収奪を根本とし、その農民収奪の中心はウクライナであった。そのウクライナが現在、国民国家・主権国家を確立しようと、ロシアに対する国民戦争を戦っている。東欧革命とソ連崩壊の継続である。

それは、1990年前後だから、西ヨーロッパには大きく遅れたが、東ヨーロッパと中央アジアにおけるブルジョア革命の大波であった。ロシアの支配から脱却し国民国家・主権国家を確立する。ウクライナと同じ立場、人民も政府も陰に陽に支持し連帯している。

### ・ロシアの侵略に反対し祖国防衛のウクライナを支持する これが人民の立場

ロシアの反戦闘争がある。世界的にウクライナ支持・連帯の闘争がある。しかし、よど号グループは逆、反覇権・脱覇権とロシアを支持し、アメリカ覇権の代理とウクライナに反対している。小西君は言う。「反覇権・脱覇権の……闘いの軸、それは『国』……。」この「国」はブルジョア階級、朝鮮の官僚ブルジョア階級の側で発言していると思う。ロシアとウクライナ、両国の関係と立場も、両国人民の闘争も見えていないと思う。

### ・アメリカがウクライナ戦争を第三次世界大戦へ拡大する？ その力はもうない。

主戦場は対中国のアジア、そこに戦略的に集中する。国内的には厭戦と反戦に直面し、サンダース的左派とトランプ的右派に分裂している。実際の戦争=参戦はしないし、できない(それが実

は人民のウクライナ支持・連帯に有利)。できるのは経済制裁と軍事援助(しかし軍事援助でウクライナの戦争がアメリカの代理戦争に変わりはない)。

## (2)中ロとアジア・アフリカ・中南米が連携する反米欧日の反覇権？ ありえない

小西君とよど号グループの論理の中心はこれですが……

### ①そもそも中国とロシアは帝国主義 反米は反覇権ではなく覇権主義

「……両国とも、政治権力を握っているのが共産党など経済から独立した政治勢力であり、決して独占大企業ではない……。」「中ロを帝国主義国と見るには無理がある……。」

中国は官僚が国有経済を支配する官僚制国家資本主義、共産党自体が官僚ブルジョア階級、習近平はその指導者。ロシアは国家資本を篡奪した私的独占資本が支配、プーチンはその政治的指導者。政治が「経済から独立」とは言えず、論証になっていません。

中国とロシアは帝国主義である。中国・ロシアと米国・西欧・日本の間に覇権闘争がある。ここまではもう論を待たない。

#### ・アメリカに対する位置関係と力関係 後発帝国主義・中国が第三次世界大戦の策源地

20世紀後半、アジアが、開発独裁と官僚制国家資本主義によって、後発資本主義として発展した。グローバリズムの中心であり、世界的規模の大きな不均等発展である(アフリカが続く)。21世紀、中国が、後発帝国主義として登場し、アメリカに挑戦している。

かつて、ドイツが、イギリスの覇権に挑戦して2度の世界大戦を起こした(覇権はアメリカに移行)。覇権を保持するアメリカは現状維持=守勢、覇権奪取の中国は現状打破=攻勢。歴史的趨勢は米国の衰退と中国の勃興。現在の中国はかつてのドイツの位置にある。

### ②21世紀の基調 米欧日と中ロ 両方の帝国主義の両方の覇権主義に反対する闘争

小西君は中ロと連携した反米欧日・反覇権という14ヶ国を列挙。「朝鮮やキューバ、ベネズエラ、ニカラグア等々の中南米諸国、ベトナム、タイ、カンボジア等々のASEAN諸国、イラン、シリア、イラク等々の中東イスラム圏諸国、そして、インドやブラジル、トルコやサウジ等々のBRICS、G20、『地域大国』といわれる諸国」。しかし……

インドとベトナム？ 親口は対中であって反米ではない(インドは米豪日とQUAD)。トルコとサウジ？ 地域覇権主義であって反覇権ではない。アフリカがないのは？

#### ・反ファシズム連合が分裂して反米連合 その反米連合も分裂

アフリカではロシアがソ連の影響を引き継ぎ、中南米では左派政権が登場し、中国が両地域で影響力を拡大している。20世紀後半は、アメリカ(と西欧)帝国主義に対する闘争であった(反米連合)。植民地独立・民族解放闘争(「非同盟」と「第三世界」と、それを利用したソ連帝国主義の覇権闘争(冷戦)。それが21世紀に入っても続いている。

しかし、アジアは先行し、新しい21世紀の基調が始まっている。広範に後発資本主義が発展し、中国が後発帝国主義として登場し覇権主義を拡大している。とりわけ南中国海問題と台湾問題。韓国・台湾とASEANとインド、アジア諸国は中国と対立していく。資本主義の発展は人民の民主化闘争と少数民族の民族解放闘争を生み出し成長・発展させるが、それが中国の覇権主義と全体主義に対立していく。反米連合の分裂。

覇権には必ず反覇権。ロシアは早晚挫折するが、中国はしばらく覇権を拡大する。対中国の反覇権はアジアだけでなく、アフリカと中南米でも必ず起こり拡大する。

#### ・ウクライナ戦争に続く台湾危機を考える 第三次世界大戦は不可避かどうか？

中国が覇権主義で併合戦争、台湾が自己決定権で祖国防衛戦争、米国・日本が対中国・覇権闘争で参戦、第三次世界大戦の危機がある。しかし、香港とウクライナの経験がある。

歴史も進む。沖縄に反基地と反戦の人民闘争がある。米国・日本の人民が参戦に反対する。アジアと世界の人民が台湾を支持し援助する。台湾と沖縄が結合する。こういう闘争で人民が両方の帝国主義に反対し、第二次世界大戦と反ファシズムを超えられないか？

### **(3)最後に 論を変えます 今からでも帰国すべきです**

亡命していれば、言いたくないことも言わなくてはならず、言いたいことも言えない。日本人民に依拠した日本革命へ、出直すべきです(『追想にあらず』参照)。(おわり)